
仮面の騎士（ハイド・ナイト）

バカ夜空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイド・ナイト
仮面の騎士

【Nコード】

N3620Y

【作者名】

バカ夜空

【あらすじ】

銃、剣、刀、その他もろもろの武器を習う文武学校。

そこに通う表の主人公は最低ランクのDランクだが、裏では銃の整^ガ備士をやっている仕事は少ないがそれなりの成果を出していた。

主人公と学校生徒達などのバトル？ ラブ？ コメディ？ ものです！

『昔話（レジェンド）』

昨年（きょねん）の事件の一つにこう言う話がある。

一つ、そこは一般市民が普段はほとんど訪れない小さな村である。

一つ、野獣モンスターが出やすい非常に危険な地域である。

これらを充たしていた村で、野獣モンスターに捕らえられた中学生の女の子を助けようと村の人たちが戦っていると、どこからともなく現れた仮面をつけた騎士が参戦してくれたという話だ。

それを見たものは言った。

それは野獣にさえ恐れず立ち向かう勇気があったと。

それと一緒に戦ったものは言った。

それは剣を使い銃をも使い素手でも戦える武の天才だと。

それに助けられたものは言った。

それは物語に出てくる騎士様のように強くかつこいいと。

子供に読み聞かせる絵本にもされた『ハイド・ナイト仮面の騎士』と呼ばれる謎の仮面男のお話だ。

その正体は今もまだ謎であるが……。

「……き……さ……」

「……きなさい……そら」

誰かが俺の名前を呼んでる。眠たいんだ、静かにしてくれよ。

「起きなさいよそら！」

うるさい声でたたき起こされた場所。そこはいつものベッドの上だった。

窓から明るい光が入ってきていて、起きたばかりの俺の目にはその光は拷問のように辛い。

いつもの女の子が起こしてくれたようだが、簡単には目を開けられないのでその子を見ることができない。

まあ、見えなくても声でわかるんだけど。

「お休み、夏帆」

起こしてくれた女の子 さくら かほ 笹倉夏帆におはようではなくお休みと告げる。

夏帆とは幼稚園が一緒に親の中も良かったのでいつも一緒に遊んでいた。世間一般で幼馴染みと言うやつだ。

普通幼馴染みでも朝起こしに来るなんて漫画のヒロインくらいだろう。

しかし俺の両親が事故で亡くなっていて、家に誰もいない。

今は妹と二人暮らしをしているが俺も妹も一度寝ると目覚まし時計程度では起きない。

それでいつも夏帆に起こしに来てもらっている。でも今日は眠いから起こさないでほしかった。

「お休みなさい。……って違うでしょ！ 起きなさいよ!!」

一人でノリつつこみしてるなって思っていたら、腹を割るような勢いでかかと落としをしてきた。確かこれは俺の母さん直伝の技だ。流石に俺にはしなかったけど母さんが父さんによくやってたのを覚えてる。……よく耐えてたな、父さん。これ結構痛いぞ。

「起きるから殺さないでくれ。マジで死にそう」

痛む腹を抑えながらゆっくりと立ち上がる。あー、鳩尾に入って
てかなり痛い。

「あんたはいちいち大袈裟なのよ」

腹にかかと落としをした張本人が逆ギレしてきた。そんなことし
なかったら大袈裟なりアクションもとらないのに。

「自分の朝ごはん作りすぎて余っちゃったから、机の上に置いとい
たわよ。……ち、違うわよ！ ホントに作りすぎただけなんだから
！！」

何故か最後はキレ気味で言ってきた。俺は何も言っていないのにな
んで怒ってるんだろう？ 女の子は不思議だな。

まあ、ここまではちよつと仲良し（？）な幼馴染みの会話に見え
るだろ？ ここまでは世間一般なんだけど……、

とそこでドアに手をかけた夏帆が振り返って言った。

「あつ、そうだ。この前 ワルサーP38 を現地購入してきて、
今は倉庫に入っているから後で整備しといてくれる？」

そう、何を隠そう俺は銃ガンズミスの整備士で文武学校の戦闘生バトルマニアだ。

銃の整備士は父さんがそうだったから継いだだけ。まあ、多少技
術がいいだけだ。

戦闘生は、その名の通り戦う生徒で色々な科目があり、俺はその
中の銃刀科じゅうとうかに所属している。

ワルサーP38 はドイツの自動式拳銃で、古いからあまり出
回らないが現地購入するほどの品でもないんだけど……まあ、整備
程度ならすぐ終わるし学校に行く前にパッとやってしまおう。

そうして俺がベッドから立ち上がった瞬間　ぐうううう。

「……まずは朝ごはんを食べよう」

お腹がSOSを出してきたので朝食をとるためにドアを開けてリ
ビングへ向かった。

『整備（メンテナンス）』

早々に食べ終わった俺は先ほど頼まれた銃の整備メンテナンスをしていたんだが、

「かなり古いな……」

銃床レシーバーにはひびが入っているし、引金トリガーも欠けてるから取り替えないと使いにくいだろう。

それらのことからこれが何十年も使い込まれたと見える。

それにしても……夏帆はどこでこれを手に入れたんだろう？

現地購入って言うてたから新品じゃないことはわかってたけど、ここまで古いものはそうそうどこにでも置いてあるとは思えない。

「後で聞けばいいか」

頭を切り替えて銃床レシーバーと引金トリガーを直していると、俺がいるガレージのような倉庫の入り口から、夏帆に「学校に行くわよ」と声をかけられた。

「もうそんな時間か」

俺は近くにあった時計を見た。その針は確かに『8』を指している。

授業は八時四十分からで学校までは三十分かかる。そろそろ出た方がいいだろう。

「うん、そろそろ行こっか」

「これもちゃんと持って行きなさいよ」

夏帆の言葉と一緒に投げられたのは俺が愛用している刀の蒼桜と銃のグランパレットブラックスミスだ。

蒼桜は俺が小さい頃に刀鍛冶だった母さんが俺に造ってくれた唯一の刀。名前は、造ったとき刀に反射した桜が蒼く見えたかららしい。

ほとんど銃を使うから刀はあんまり使わないんだけどね。

ちなみに母さんは病弱で、親父が教えてくれなかったけどどうか

の外国から、緑の多いこのグランプレインに移ってきたそうだ。しかしその母さんもその刀を造った翌年に病気で亡くなった。

葬式にき来ていた人々は刀鍛冶としての才能がずば抜けていた母さんを「惜しい人を亡くした」と口々に言っていた。

……母さんの話はあまり好きじゃないんだけど。

話を変えて……銃のグランレットは父さんが使っていたちよつと古い自動拳銃で、オートマチック回転式拳銃とは違い発射の反動で自動的に次弾が装填される。

だから俺や父さんみたいな早撃ちには使いやすい代物だ。

それに父さんから譲り受けてからちよつと改造して、一度で弾を十六発撃てるようにした。一回の依頼を少ない弾薬でクリアすることができるので楽だ。

「お兄ちゃん、置いていくよー？」

倉庫の入り口　夏帆のいる辺りから俺の妹の声が聞こえる。きちんと起きれたんだな。……いや、起こしてもらったのか。

遅刻する気はさらさらないので俺は倉庫から出た。

「おはよう、セラ」

ぎりぎりまで寝ていたのか、まだ眠そうな顔で欠伸をしている。

「髪の毛がはねてるぞ」

「え！？　どこ？　どこ？」

慌てて髪の毛を触りだした。その、慌ててる姿は……我が妹ながら可愛いな。まるで俺と血が繋がってないみたいだ。

「セラちゃんをからかわないの」

夏帆に頭を叩かれたので反省。結構痛かった。

セラは夏帆に「はねてないよ」と言われると「むう……お兄ちゃんのいじわるう」と頬を膨らませて怒ってきた。

気をつける。それは一部のマニアなら瞬殺されそうな言い方だぞ。いや、意外に使えるか？

「妹をエロい目で見るな！」

「うわっ！！　危ねえ！」

夏帆の回転蹴りをぎりぎりでかわす。

今のはマジで危なかった。避けなければ顔面コースだ。

「次エロい目でちゃんを見たら確実に当てるからね！」

「そんな目で見てねえよ！」

俺も妹に発情する気は全くねえよ。

「二人ともそろそろ出ないと遅刻しちゃうよ？ 喧嘩の続きなら後でしてね」

が歩き出したので俺と夏帆は一旦喧嘩を止め、後ろに続いた。

普通なら電車かバス通学なのだが、俺とセラは金がないので必然的に歩いて行くことになる。

夏帆も最初は文句ばかり言ってたけど、いつも俺達に合わせて歩いて通学してくれている。行動とは裏腹に優しいやつなのだ。

『実力（アビリティ）』

いつもよりちょっと遅めに出てしまったけど、この時間なら……ぎりぎり間に合うだろう。

「そっぴいや夏帆。風の噂で聞いたんだが、Aランクになったんだって？ 凄いいじゃん！」

「え！？ そうなんですか？」

「なんとかってやつも結構あったけど。それより。あんたに言われると凄く腹が立つんだけど」

「仕方ないですよ夏帆さん。お兄ちゃんクエストは普段はちゃんぽらんでダメダメに見える唐変木ですけど、依頼とか、ちゃんしないといけないところはきっちりしてますから」

後ろだけ聞くといいこと言ってるみたいだけど、最初の方は完全に暴言だよね？

まあ、実際そうだしね。

「ほんとなんであんななかがSランクであたしがAランクなのよ！ 絶対あんたより真面目に授業を受けてるし、依頼の達成度だつて負けてないのに……」

「それは実力がSランク並みってことだろ？ 本当は全然違つよ。でも、なんでだろ？ やっぱりこの実力？」

「殴りたいのかな、あんたは」

「冗談です」

目が本気だ。絶対殴ってくる気だつたな。

「でも実際夏帆さんとお兄ちゃんってどっちが強いのか？」

「私の方が強いわね」

「夏帆だろうな」

俺と夏帆両方が即効で同時に言う。

こいつ自信満々に言いやがって……。

しかし、夏帆に俺が勝てない理由はある。

「な、なんですか？」

「こいつへたれだから」

「断じて違う。勝手に捏造するな」

へたれでも実力は夏帆より上の、しかも銃刀科でSランク並なんだぞ。戦闘で負けるはずがない。

さっき言ったように、俺達の通っている高校には結構科目があるんだけど、その中で一番Sランクが少ないのが俺の所属している銃刀科なのだ。

「このバカは相手が仲間だと銃を使わないのよ」

「俺は絶対仲間^{クエスト}に銃口を向けないだけだ」

「お兄ちゃんかつこいいね」

そう言われると悪い気はしないな。

「バカなだけよ」

そう言われると心が痛いな。

仲間に銃を使わなくても、負けることはないのだが、力を押さえないと、めんどくさいことになるからな」

実を言うと、俺の学校内でのランクは最低ランクのDになっている。実際、実力は最高ランクのSなのだが、それは夏帆とセラと文武学校の校長しか知らないことだ。

隠しているのはただSランクの依頼^{クエスト}が嫌なのと、いちいち絡まれるのが嫌というどうでもいい理由。

話は戻るが、そのSランクの実力を隠すために、俺は校内ではあまり戦わないようにしている。

もし誰かに見られたりとか、戦ったやつが広めたら、Sランクだとばれてしまう。

だから俺が夏帆に勝てないということだ。

「お兄ちゃんも苦労してるんだね」

「言うほどでもねえけどな」

そう言い、校門を通過して、立ち止まる。

「私はこっちだから。またね、夏帆さん、お兄ちゃん」

俺は「おう」と単調な返事をして再び歩き出した。

高校は中学と同じ敷地にあるが俺達の家からは中学の方が近い。早足で行かないと遅れるかも。

夏帆も同じことを思ったのか、走り出したので俺もついていくように走った。しかし残念なことに、それと同時にチャイムが鳴り響く。

「夏帆、先に行ってるぞ！」

それまで後ろについていくように階段を駆け上がった俺なのだが、時間が時間なので夏帆には悪いが先に行かせてもらおう。

今は一階と二階の間にある階段にいるので、二階につくと俺は窓から飛び出した。

このままでは落ちるので、ワイヤーを伸ばし、先に取り付けてあるフックを四階の窓に引っ掛ける。

後は壁を力いっぱい蹴り飛ばし、それと同時にワイヤーを回収すれば四階まで登れる。

左右を眺め、誰もこちらを見ていないか確認して、何事もなかったかのように教室に入る。ぎりぎり間に合った。

『要請（チャレンジ）』

俺が席につくとチャイムが鳴り終わる。俺が開けておいたドアから送れて夏帆が入ってきた。

「あんた私を置いていったわね!!」

「仕方ないだろ？ 間に合いそうになかったんだ」

「だ、誰のせいで遅れたと思ってるのかな？」

「……俺に整備を頼んだ夏帆のせい？」

「殺してあげる」

そう言い、スカートの中から拳銃 メアトル・カルチャー 対人連銃を取り出す。これ

は火力は少々弱いが反動がかなり少なく女子に人気の自動拳銃だ。

撃たれると、火力が弱いことを差し引いてもかなり痛いことになりはない。

あの乱暴な夏帆でも流石に教室では……って目が本気だ!!

夏帆が対人連銃の引き金を引こうとして、

「おい、笹倉。銃の使用を許可するとはいえここは教室で、しかも朝のHR中なんだぞ？ 発砲するなら他所でやってくれ」

「う………すみません」

夏帆は周りを見て恥ずかしくなったのか頬を赤らめた。

その後俺をきつく睨んで、対人連銃をホルダーになおし席に戻った。

……危なかった。先生が止めなければ確実に俺を狙って撃ってたな、あいつ。

佐野先生は夏帆がおとなしく席に座ったのを見てちょっと荒い口調で、

「さてと……じゃあ、朝のHRを始めるよ。まずはこれを見る」

黒板にバンツと叩きつけたのは、一枚の紙切れだった。

これは俺の一番嫌いなタイプだ。俺は窓際の一番後ろの席なのでよく見えないが佐野先生が黒板に紙を貼りつけるときは大抵これだ。

「このクラスに討伐要請がきてる。校長の押し印付きでな」

佐野先生が白紙の紙をみんなに配り始める。

バトルチャレンジ
討伐要請。

クエスト これを話すには依頼と要請の違いを知ってもらわなければならない。
クエスト い。

クエスト 通常、依頼とは放課後に単位が欲しくて個々が自分にあつた依頼を受け、それをこなすと報酬と単位が貰えるという簡単なものだ。

チャレンジ しかし、要請は依頼とはいくつか違う。

要請はクラスで選ばれた六人がモンスターや犯罪者を討伐、もしくは逮捕するものである。

依頼と違い、自分がその敵を倒せるランクでなくても受けることができるが、その分難しかったり強かったりするので病院送り最悪の場合死ぬこともある。

それに校長の押し印ありということはAランク以上の要請になるのだ。

俺は校内で実力を出したことはないが、先生達は知っている。それにこのクラスにAランク以上は夏帆を含めた三人しかない。俺は策士としても知られているので、

「多数決の結果、Aランク春日谷陽菜、茅野美奈、笹倉夏帆。次にBランク新庄明希、ジェシカ・ストロープ。最後に……Dランク中川そら」

こんな感じにいつも選ばれるんだよなー、俺。要請にDランクで選ばれる戦闘生は全クラスの中で俺ぐらいだろう。それぐらい低ランクのやつは選ばれない。

「また中川か……。Dランクのくせによく選ばれるな、お前」
「そうですね佐野先生。なぜ俺は選ばれるんでしょうね」

「それはこのクラスがバカだからじゃないか？ とりあえず、今呼ばれた生徒は今からすぐ準備をして行くように」

佐野先生は今呼んだ生徒たちの顔を見て「じゃあ、解散だ」と黒板に貼り付けた紙を投げた。

それを取ったのは『クイック・ユニコーン高速の剣獣』という二つ名を持ち今回のメン
バーにも選ばれた、刀銃科の茅野美奈さんだ。

赤 いや、緋色に近い髪の毛を揺らしながら紙を取った彼女は、
二つ名通り高速だった。

大抵Aランク以上には二つ名がつく。夏帆も二つ名をもらったと
か言ってた。

それにしても……人間で、しかも女の子に獣は酷いと思う。

「お前も早く行け」

佐野先生に言われ、辺りを見回すと選ばれた生徒はみんないなく
なっていた。

まずい。出遅れたな。

俺は急いで鞆に入れておいたテイスタP82と言う小型拳銃を手
にとり、紙に書いてあった集合場所 校門に向かった。

『編成（ダイバージョン）』

一通り用事を済ませて校門に行くと、既に茅野さんと茅野さんの戦^{せん}妹^{まい}弟^{てい}であるう男^おが待機していた。

戦^{せん}妹^{まい}弟^{てい}。

中高一貫の文武学校では、まだ依頼などを受けられない中学生の育成として、高校生が中学生と二人一組でチームを組むのだ。

人数が足りない場合は三人一組になる。俺も三人一組なのだが、一人は今日休みだそうだ。

高校生は男女比率が同じくらい（若干女子が多い）なのでいいのだが、中学生は圧倒的に女子が多いのだ。

なぜ女子が多いかと言うと、男子は姉妹校^{ひいらぎ}の柊^{はな}学校^{がく}に推薦入学で入ってしまうから。

なのでほとんどの高校生が中学生の女子と組むことになる。

それは別にいいのだが、

「先輩〜！ 先輩先輩先輩〜！！ ずっと会いたかったですよ

！」

こんな感じになる場合もあるんだよな。誰だ、こんないらん制度作ったやつは。

「先輩！ 私寂しかったんですよ？ 先輩がDランクの依^ク頼^{エスト}しかうけないから、ほとんど一緒にいられないし」

「俺の知ったことじゃない」

先輩先輩うるさい彼女は、俺が戦妹弟^{せんまいてい}を組んでいる中学二年生の梅宮桃^{うめみやもも}だ。

桃は依頼ができない中学レベルでBランク。俺より軽く実績はいい。

それにこいつは俺の本^{ほん}気^きを見たことがある。

俺が高一の頃、Dランクの軽い討伐依頼に行ったとき、たまたま会ってしまったのだ。中一だった頃の桃に。

そのとき、急いでいた俺は本気でモンスターを討伐した。それを見られてから、いつもいつも「戦妹弟を組んでください!!」と言
い寄られて、仕方なく組んだのだ。

実力的には申し分ないが戦闘以外はべたべたしてくるので、全体的にはかなり微妙な子だ。

まあ、慕ってくれるのは嬉しい。

「落ち着け、桃」

未だ先輩先輩言ってくる桃を黙らせていると、残りのメンバーが来て、全員揃った。

それから軽く自己紹介をして、目的地へと向かった。

ちなみに選ばれたメンバーと戦妹弟は、春日谷さんと宮城吹雪さん、茅野さんとその弟の茅野陸君、夏帆と俺の妹のセラ、新庄さんの戦妹弟は休みだそうで、ストロープさんと楸玲奈さん、そして俺と桃。

……このメンバーなら俺は力を使わなくて大丈夫だろう。
そんな気軽な気持ちで目的地に向かった。

「遅いぞ、中川そら」

「そうよ。早くきなさいよ」

「茅野さんも夏帆も早すぎるんだ。もうちょっと待ってくれ」

「私のことは茅野、もしくは遥でいいと言ったはずだが?」

「……すいません」

茅野さん……じゃなかった。茅野……と夏帆のスパルタがかなり効く。

俺がちよつとでも遅くなったら、遅いだの早く来いだの言ってくる。夏帆だけに言われる分はまだ大丈夫なのだが茅野が加わって結構辛い。

俺達の会話を聞いていた陽菜が「こ、ここで休憩にしませんか?」

と助かる提案を出してくれた。

ちなみにバス、もしくは電車移動かと思ってたらまさかのランニング。場所がそう遠くないからって理由で。

「ありがとう、陽菜。もうちょっとで死ぬところだった。」

「い、いえ、とんでもないです！ 私はただ中川君が疲れてそうだなー、って思ってただけですから！！」

「それが俺からしたらありがたいことなんだよ」

「そそ、そんなもつたいないお言葉を陽菜にかけていただけなんて……ああ、ありがとうございます！」

俺が一番仲がよくなったのは多分この春日谷陽菜だ。彼女は少し控えめな性格だが、先ほどのように俺を気遣ってくれる優しい性格を持っている。そんな性格このメンバーにはなかなかいないぞ。

「……中川そら。今悪口的なことを考えなかったか？」

「気のせいだ」

茅野はかなり勘が鋭いな。

「……そうだな。中川そらが私を裏切るわけがないな」

「……………」

裏切りはしないが俺達の仲はそこま でよくないと思う。ばれなかったことはラッキーだけど。

「こんなものを拾ったんだけど……姉さんはなにかわかる？」

茅野の弟である陸君が拾ってきたものは……なんだ、これ？ 黒く、筒状になっていて少し熱い。

これはまるで……、

「陸君、ちょっと貸してくれる？」

「あつ、はい。わかりました」

俺は陸君から受け取った謎の物体を見る。

確かにこれを扱っていてもきちんと整備しているもの以外ほとんど気づかないだろう。

今では俺のように銃の整備士がいるから、自分で整備しているものは限りなく少ない。^{ガンスミス}

もうわかったとおもうが、これは拳銃の銃口　しかもさっきまで使っていたと見える。

しかし、銃口だけしかない。……なにかに切られているみたいだ。この挟られたような切り口は……まさか野獣！？
モンスター

「？　どうだ、中川そら」

「これは拳銃の銃口だよ。それにこれの使用者は多分この周辺で襲われている」

「襲われてるの！？　早く助けないと！！」

夏帆の言う通り、早くしないと野獣に傷をつけられるかもしれない。

「みんな一緒に行く方が安全だけど三チームに分けさせてもらうよ。いいかな？」

みんなに賛成を得ようとするが、三チームにする意味がわからないのか、なかなか頷いてはくれず首をかしげている。

「ただ俺以外高校生の個々はみんな弱くない。だから分けたとしても負けることはないだろ？　そして分けた方が捜しやすい。これでいいか？」

俺が事細かに説明する。その意味を最初に理解したのは陽菜だった。

「さ、策士って呼ばれてる中川君が言うからには意味があると思うの。ここでじっとしてるよりはいいいんじゃないかな？」

そして一番に　いや、正確には二番に動き出した。

一番の彼女はすでにいなくなっている。『クイック・ユニコーン 高速の剣獣』の茅野だ。多分考える前に行動したんだろう。

「陽菜が茅野の方向に行ったから、後は二チームに分けよう」

そしてジャンケンをした結果、俺達と新庄さんのチーム、夏帆達とストロープさん達のチームに分かれた。

バランス的には夏帆達に片寄っているが、俺達のチームも俺が本気を出せば負傷者が出ることはないだろう。なるべく本気は出したくないけど。

「これを渡しておくから、敵を見つけたら使ってくれ。大きな音ができるからすぐにみんなが駆けつけてくれるはずだ」

夏帆に手渡したのは ロケット花火だ。時間がなくてこれしか持ってこれなかったのは不覚だけど。

ロケット花火は使い方しいでは目眩ましにもなるから結構使える代物だ。

そして「解散」と先生の真似をすると、みんな一斉に動き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3620y/>

仮面の騎士（ハイド・ナイト）

2011年11月20日01時16分発行